

## 地域子育て支援拠点研修事業〈東京開催〉中堅支援者向け研修

### <開催概要>

- ◆開催日:平成23年9月24日(土) 10:00~16:30
- ◆会場:国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区代々木神園町3-1)
- ◆主催:財団法人子ども未来財団・NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会
- ◆後援:厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・東京都・子育て応援とうきょう会議
- ◆協力:NPO 法人せたがや子育てネット
- ◆参加者数:136人(行政17名・NPO/任意団体87名・その他団体/企業19名・その他13名)



### <プログラム>

- ◆開会・主催者挨拶 武田久恵さん 財団法人子ども未来財団 研修調査部研修事業課
- ◆主催者挨拶 松田妙子さん NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事

#### ◆プログラム1 基調報告 10:10~10:40 『地域子育て支援拠点事業の概要と展望』

[講師] 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室 黒田秀郎さん

現在の子育て環境についての概観がなされた後、子育て支援事業の課題と展望が示されました。今後、虐待防止等の観点からもひろば型の子育て支援拠点が地域の諸拠点、関係行政機関とより密接につながっていくことの必要性が説明されました。また、国の施策については「子ども・子育てビジョン」と「子ども・子育て新システム」についての説明がありました。子育て環境の具体的な数値目標が示された後、新システムの間とりまとめの説明があり、新システムの目標(すべての子どもとその家庭への支援、幼保一体化)と達成手段(社会全体で費用負担を行い、実施は主に基礎自治体が担うこと、そして政府の推進体制と財源を一元化すること)が示されました。



#### ◆プログラム2 基調講演 10:45~12:00

『”虐待予防”や”子ども・子育て新システム”の視点で地域子育て支援拠点の役割を改めて考える』

[講師] 柏女霊峰さん 淑徳大学教授

はじめに「地域子育て支援拠点事業における活動の指標〈ガイドライン〉」を参照し、今後の各拠点の活動の課題として、活動の基盤である原理や方法論的枠組みに関する議論を進めて共通の枠組みをもつこと、福祉サービスとして利用者の立場を重視することが挙げられました。また、これからの地域子育て支援が保障すべき事項として、社会的養護や虐待、障害と関わる子どもたちも一緒になった切れ目のない発達の保障と、親子の絆の形成と紡ぎ直し、多様な人との関わりについての提言がありました。さらに、「すべての子どもは第三者の大人から抱っこされる権利がある」という考えに基づいて、ひろば活動の意味を子どもの視点から捉えることの重要性についても述べられました。これらの点を踏まえ、今後さらに行政やNPO、民間と役割分担をしながら協働していくことが必要であると述べられました。



◆プログラム 3 分科会 13:00～16:30

＜第1分科会＞『つなぐつながる一子育て支援家庭によりそう多様なアプローチ』

コーディネーター:奥山千鶴子さん NPO 法人びーのびーの 理事長

事例報告 :森田圭子さん NPO 法人わこう子育てネットワーク 代表理事

事例報告 :千葉勝恵さん NPO 法人手をつなご 理事長(練馬区)

コメントーター :柏女霊峰さん 淑徳大学 教授



●各ひろばの取り組み報告

千葉さんからは、練馬区の子育て状況や子育て支援拠点の内訳についての説明がなされた後、区立の子育てひろば「貫井びよびよ」について、写真をもとに紹介がありました。特徴として、外国人の親が多いこと、学生や高齢者の方など様々な人たちとの交流の機会を設けていること、双子の会やコンサート等のイベントが多く開催されていることも挙げられました。また、ひろば「あいあいあい東大泉」では来年度から障がいのあるお子さんへの具体的な対応も予定されているそうです。



森田さんは、和光市の子育て状況について概観された後、家族ごとに選べるよう用意された様々な子育て支援の内容と、今後の展望(パパ組の推進等)についてお話されました。その中で、その地域の特性を把握することの重要性も指摘されました。また、和光市で実施している「ホームスタート」について紹介がありました。先輩ママによって行われているピアサポートであり、無償であること、専門家(オーガナイザー)による指導や助言を受けていること等は、その後のディスカッションでも取り上げられました。



奥山さんからは、はじめに横浜市で実施されているつどいの広場での一時預かりについて紹介がありました。具体的な実施状況に加えて、その目的や特徴についても話があり、一時預かりへの不安や抵抗を下げるためにひろばの中で実施していること等を説明されました。つぎに、「わくわく子育てサポーター」の紹介がありました。これは子育てに大変さを抱えたご家庭に学生が向向き、その場でお手伝いをするもので、これまで8年間続けられており、今年の夏も約200名の学生から応募があったとのことでした。



柏女先生からは、「ホームスタートのように、まだ制度化されていない活動の位置づけや、同じサービスでも提供者毎に値段が違うことあるということは考えていくべき点である。地域の特徴、地域の歴史やそこで暮らす人同士の関係性までも把握することが地域子育て支援拠点の活動には重要。「何でもしてあげよう」という支援をする側の熱意によって、利用者の問題に巻き込まれてしまうことを防ぐために、応援してくれる機関や支援者が必要です。」とコメントをいただきました。



## ●ディスカッションタイム:ひろばに来ていない人について考える

分科会後半では、グループで「うちのひろばに来ていない人はどんな人か?」というテーマで話し合いを行い、順に発表して全員でシェアリングをしました。次に、グループでひとつテーマになる項目を決め、40分間で以下の項目について話し合われました。柏女先生や千葉さんもグループに参加され、活発なやり取りが行われました。



- ① ひろばにつなぐにはどうしたらよいか
- ② ひろばでその人たちが過ごしやすくするにはどうしたらいいか
- ③ その人たちが地域に元気に戻って行くにはどうしたらいいか
- ④ キーワードを出す

各グループが発表を行いました。例えば【パパ】をテーマに選んだグループからは、①ひろばにつなぐためにどうしたらよいかということについて、お母さんから声かけをしてもらうことや、男性スタッフを入れて過ごしやすくすることや、遊びのリーダーになってもらうこと等があり、④キーワードとして「頼る、ほめる」が発表されました。

## ●ひと言

(森田さん) “よく考える”というプロセスでいろいろな話をしました。ひろばでできることがいくつかあると思う。それでも来ない人がいたらアウトリーチを考えてもらってもいいかもしれません。

(千葉さん) 地域、個人、時代によって子育て支援は変わります。しかし子どもには生まれる場所は選べません。子どもが幸せなら親も幸せなのかなと思う。子どもの笑顔を守る子育てひろばでありたいと思う。

(柏女先生) 班にも入れてもらい3時間半とても楽しかった。ある親御さんがひろばでそれまで言えなかったことを泣きながらスタッフに話したという話を班の中で聞いたが、そういう思いを忘れてはいけないと思います。

(奥山さん) ひろばに来てる人は、ひろばで受け入れやすい人だけではないかと思えます。そういうことを反省していかなければならない。今10組に1組は都内で国際結婚。ひろばの10組に1組が外国人でなければ、外国人の親が来にくいひろばということ。来られない人に思いを馳せられるひろばになればいいなと思えます。

## <第2分科会> 「地域子育て支援拠点のスタッフに求められる力」

【コーディネーター】 松田妙子さん NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事

【パネリスト】 新澤拓治さん 社会福祉法人雲柱社 施設長

【パネリスト】 保志幸子さん 港区子ども家庭支援センター 相談担当係長

【事例報告】 小原聖子さん ゆったりーの運営委員会 代表(新宿区)

## ●事例報告

### ★ゆったりーの運営委員会 小原聖子さん

スタッフは保育の資格などを持っていない(プロではない)ので、地域のお母さんという立場です。そのため、ある意味、手探り状態でひろばを運営しています。精神的に問題を抱えている親が来た場合の対応を研修していないなどの問題点もあり、資格の勉強をした人には当たり前のことでも、問題にぶつかってから知るケースも多々あります。虐待については、何か起きた時に、“実は…”がある。直感は重要な感覚。自分で解決できないことは、誰に紹介するのか、自分の限界を知ることの懐の深さも大切です。





## ★新澤さん

小原さんが運営しているひろばは素人的な良さがあります。一方、自分のように専門家も同じ仕事をしています。子育てが多様化している今、対応する側も多様化していきますが、小原さんの言う直感はとても大切な感覚です。発達の相談を受けた職員がフィルターをかけてしまいがちですが、相談をしたお母さんの“あれ？”と思った直感を信じて聞いてあげることも必要。自分の枠組みにはめ込まず、それを広げ、受け止め、結果的に自分の中の引き出しを広げる。そのためにネットワークを作り、東京の様々なネットワークを利用することも必要ではないでしょうか。



## ★保志さん

自分の価値観を押し付けず、また、1件の虐待通報のために、何度でも出向き『信じられない。』『もうダメ』ではなく、淡々とやっていくことを心がけています。重篤なケースは児童相談所や警察でしか対応できず、子ども家庭支援センターでは児童相談所に通報することしかできません。港区では、連絡会を開催したり、出向いて直接会って話をすることもあります。行政側として、まだまだ不十分なので、ひろばは積極的に支援者としての立場でやっていくことが求められています。ひろばとの連携についてもまだ不十分な点がありますが、子どもとお母さんに一番近い立場にあるのは、やはりひろばなどの「現場」だと思います。



## ●グループに分かれてワークを実施

### ★力とは何か？

### ★困った親や子、行政の話(どのように向き合っていくか)、またその解決法や質問など



## ●ワークの報告を受けてコメント

### ★保志さん

クレームについては、「クレームを入れてくれてありがとう」と思っています。決め付けるのではなく、話をしていくことが必要。全部をうまくやり遂げるのではなく、クレームを聞いて力をつけるということです。パパ友については、メーリングリストを作ると登録されるパパも多いですし、ママの知らない所で繋がっていくこともあります。スタッフを厳しい目で見ているお母さんなど辛い人ほど、スタッフの対応をよく見ている。攻撃的に出る人は不安感があるという裏返し。相談を受けた場合、丸抱えせず話をしたり、場を貸して(当事者同士が)直接話をさせると解決する時もあります。

### ★小原さん

雰囲気や壊す利用者については、やってはいけない事をした時は、毅然とした対応が必要です。また、スタッフ自らが率先して行動する。スタッフも人間。「ゆったりーの」のスタッフはプロではない。見られない時は、「無理」とはっきりと言いますし、出来る時と出来ない時をオープンに利用者に見せるということが大事だと思っています。

## ★新澤さん

共通理解を求めるのは難しい。方向性を出すのはケースバイケースで困っている事の整理が必要です。また、色々な視点が必要で、ひろばは人間関係の練習所ともいえます。スタッフが、人との関わり方のモデルとして見られていて、一人ずつのことを丁寧に考え、こうあるべきと決めつけてしまわないようそれぞれの質を高めていくことが大事。そのために、ひろばでシミュレーションをしたり、加害者・被害者でなく、みんなで作っていく雰囲気作りを心掛けるなどして、それぞれの質を高めていけばよいと思います。

## ★松田さん(まとめ)

毎日は違う。同じ図式ではないからこそ、そこに寄り添うのはすごいことだと思います。地域が違って、今日、ここで学んだことを生かして、これからもやってみましょう。



### <第3分科会> 『地域をつなぐ子育て支援拠点の役割』

コーディネーター 西川正さん NPO法人ハンズオン! 埼玉 常務理事  
話題提供 石田尚美さん NPO法人松戸子育てさぼーとハーモニー 理事長  
コメンテーター 野口比呂美さん NPO法人やまがた育児サークルランド 代表

テーマは、地域子育て支援拠点が乳幼児の子育て家庭の安心のために果たす役割について。東日本大震災を通し、普段見えなかったことに気づいたり、経験したことのないケースに遭遇したり。防災、メンタルケアなど戸惑ったこと、再確認したことを話し合いながら、改めて地域の子育て支援拠点の意義について意見交換しました。



### ■振り返り「あの時、どうだった？」

震災の日の様子、ひろばの運営者としては「利用者の安全確保」「状況判断の難しさ」「家族の安否確認」等、戸惑いや不安の声。利用者の声からは「誰いかにいるところに居たい」「ひろばがあつて良かった、集まれた」「ひろばで知り合ったお友達と一緒に行動していた」「いつから空きますか？」等、安心を求める人が多かったことが見えてきました。

野口さんからは、「ひろばでは朝礼時に避難担当スタッフ、誘導係等の役割の確認を行っています。地震の訓練も年に数回利用者さんも一緒に行っていたため、混乱を避けられました。しかし、外へ出たあとの避難先をどこにするか訓練時には想定していなかった為、早急に考える必要がありました。そして、震災後は人の繋がりを求めている人が地域に多くなったと感じています。」という報告がありました。



石田さんからは「誘導できるスタッフが当日いてくれたことでひろばにいる人の安全を確保できました。複数のひろばを運営している団体なので、揺れがおさまってから行動に戸惑いがありました。施設により事情が異なるため、判断がそれぞれに必要。特に委託事業のひろばは、行政の指示待ちであることなど、出てきた多くの課題について報告がありました。」



## ■課題の抽出「拠点とはどんな場所？」

テーマにある「安心のために」の「安心」とは？

言葉だけでは価値を共有することが難しく様々なセリフ(言葉)、行動、事実から意味づけ、実感が伴った言葉として伝えていく必要があるという説明のあと、振り返りで出てきた利用者の声から誰にとってどんな場所なのか導き出してみました。

「話せる場」 話しても大丈夫な場であることを保障する。

「利用者の主体性を尊重する場」 相手の選んだ選択(行動・思い)を尊重する。

「誰もが自由でいられる場」

西川さんは、『習いごと等、対になる話題は多々あり、一人ひとり「こうしたい」「こう思う」という気持ちを持っています。その思いや場の雰囲気との折り合いのつけ方が大事。震災を通し今まで見えなかった価値観が対立しやすい形で表面化され、それを日々みなさん受け止めていらっしやるのではないのでしょうか。「ひろばがあって良かった」という声は、お母さんたちにとって「無理をしなくてもいい場所」が他にないということではないのでしょうか?』と話されました。



## ■課題解決に向けて 「で、どうする？」

参加者の皆さん一人ひとりの意見が相互に繋がりがあ、見えてきた拠点の課題。そして、同時に生み出された多くの気づき。拠点として役割を果たした時に成立する関係性が見えてきたところで今後のどのようなアクションを起こしていくか考えてみました。そして、印象に残ったことを“キーワード”として発表、参加者で共有しました。

野口さんは「選択が尊重される場」「認める」

被災者の自主避難については大きな決断が必要です。どのような決断をしたとしてもその選択を認めていくことが大事。また、一人ひとりを認めていくには、スタッフが感情をため込まないためのケアも考えていきたいと思えます。ガイドラインを活用しスタッフの役割、地域との連携等、復習することが大事です。



石田さんは「つなぐ」

安心の場とは、地域の多くの人の目があることではないかと考えます。人・地域・社会資源を自分達の言葉で繋いでいくことが大事。また、スタッフも一人の母親であり、家族があるわけで、スタッフ同士も繋がり、連携を取り合いながら助け合いっていききたいと思えます。また、地域にはお母さんたち以外にも孤立していた人達がいたことからその人達にも声をかけられるような地域の繋がりが重要だと思えます。